

What is SIA? : アジアとの新しい関わり方

高樹, のぶ子
九州大学アジア総合政策センター特任教授

<https://doi.org/10.15017/13317>

出版情報 : 九州大学アジア総合政策センター紀要. 1, pp.89-90, 2006-06-30. Kyushu University Asia Center
バージョン :
権利関係 :



What is SIA ? アジアとの新しい関わり方

高樹 のぶ子

(九州大学アジア総合政策センター特任教授)

所属が学部ではなくアジア総合政策センターという研究機関であるにしても、私の九州大学特任教授はかなり特異な存在のしかたになる。先に多くの知識を得た者が、後輩にその知識を授ける場が大学であれば、その知識も分析能力もなく、小説家としての感性と表現力しか持たない私に、出来ることがあるだろうか。だがあった。新しい役割が与えられたのだ。その役割は、小説家としてとりわけここ数年感じてきたことに合致したので、がんばってみることにした。

プロジェクトの名前はSIA (Soaked in Asia)。Soakとは浸るの意味で、どっぷりアジアに浸るといのがSIA。半年ごとにアジアの一国の作家一短編を択び、その作家や作品をより深く感じるために出かけて行き、作家と語り合い、作品の土壌となったものに触れる。それを創作やエッセイその他の方法で情報発信する。

情報発信方法は多メディアに渡る。

「新潮SIA」——私が択んだ短編と、そこから影響を受けて創作した短編を二作並べて発表する。私の作品も可能なかぎり相手作家に翻訳して届ける。

「西日本新聞SIA」——(SIA人物紀行)として、訪問先で出会った人物をめぐるエッセイを写真付きで紹介する。3回連載。

「文芸春秋SIA」——知識人の総合誌である同雑誌のグラビアページに写真とともにエッセイを発表。

「RKB-SIA」——アジア訪問をドキュメンタリーとして30分番組として放送。特番やキー局TBSなどでも随時放送予定。

他に婦人誌にもSIA用頁を考慮中。いずれも九州大学アジア総合政策センターのSIAとして情報発信する。またこうした創作果実を、

半日のイベント「SIA-DAY」を通して参加者に生で味わって頂く。このイベントでは、作品やフォトデッセイ(写真付エッセイ)の朗読、作家との対談映像などで、その国に五感で浸ってもらうのが目的である。5年間で十カ国が目標であるが、さてどうなることだろう。

これだけ社会の情報化が進み、データが流通し、異質の世界を理解するための本も数多く出版されているのに。その結果は「とても理解など不可能だ」という理解? つまり世界の溝が深まっている現実がある。情報というのはときに、国や民族間の融和に逆行するはたらきもする。またそのように利用されることもある。データ化された数字の情報は敵愾心や反発を生むかもしれないが、一人の人間の生の情報である小説や創作物は、個から個への伝達ゆえに、たとえそれが苦く辛い情報であってもやわらかな感情を発動させる。しかも実体験と同じレベルの良質な情報なのだ。この良質な情報が、ではどこで授受されるかといえば、知識の出入口である頭脳ではなく、五感においてだろう。

こと異国の異文化に近づく方法として、知識に限界ありとするのは乱暴すぎるかもしれないが、小説の中の生きた人間の喜怒哀楽や手触りは、もっと容易に人と人を近づける。百の論より一篇の小説。これを我田引水と言う。引いてきた水に「浸る」のはいいにしても溺れてはならない。SIAのサブテーマを「理解を超えて愛するために」としたのは、いささか溺れ気味ではあるけれど、親は子を、教師は生徒を、友は友を、日本はアジアを、一神教はもうひとつの一神教を、理解しなくてはならないとする「理解強迫観念」にとりつかれて知識に走るより、もっとたのしい愛への近道がある。小説家

の出番である。

あたりまえのことだが、小説家同士の交流は経済力や軍事力や社会的レベルの落差と関係なく、対等だ。対等であるが相対的で、私は立派な優れた短篇などではなく、あくまで私の感性を刺激し、創作意欲をかきたてるものを拵ぶ。

だから一回目のSIAとしてフィリピンのブリアンテス氏の「アンドロメダ星座まで」を取り上げ、その地を訪れたときも、ブリアンテス氏だけでなく、沢山の小説家や詩人が友人として会ってくれたし、思いきり率直に話し合うことが出来た。私が高い場所から批評家的な言葉を繰り出す人間でなく、そこにいる彼らと同じ、一つの感性、一個の創作者であったことが、そうさせたのだと思う。

国と国を比べるあらゆる要素と無関係に、対等になれる土俵は貴重だ。それも正直な言葉しか使えない、文学者という特殊な人種同士の交流は、対等で相対的で、何の合一目的なく、喧嘩してもいっこうに構わないだけに、そのいつときは無分別な輝きを放っていた。ともかく、皆、よく喋った。

フィリピンでは千部売ればベストセラーという出版状況のほかに、日本では理解しにくい事情が二つあった。

そのひとつは元々多言語社会のうえ植民地支配が続き、文学の表現の主流がスペイン語から英語へ移る一方で、民族意識の強まりはタガログ語の表現者も生み出した。現在は英語が主流だが、芝居のセリフはタガログ語であったり、また同時代、同じ国の中で翻訳作業が行なわれたりする。昔スペイン語で書かれたものがあらためて英語に訳されるときの、微妙な、いやあからさまな変色も問題になっていた。

そのふたつめは、長い植民地支配からの精神的独立に、文学者の言葉が必要だったという歴史ゆえか、いまも文学者は政治や社会問題と無

縁ではいられない。文学者がテーマを求めるのではなく、テーマが文学者に向かって押し寄せてくる、という印象をもった。宗主国からの精神的独立と文学者の関係は、多分この先アジアの各国を訪れるたびに浮上してくるのではないだろうか。というより、植民地支配をまぬがれた日本が、特別なのだと思う。

ブリアンテス氏も極めて明るい、冗談好きの憂国の士だった。ここに取り上げた「アンドロメダ星座まで」は作者の少年時代を描いた、いわば彼の原風景だが、後にこの作品に対峙するかたちで「アポロ百年祭」を書いている。アメリカのアポロ宇宙船が月面着陸した百年後を描いたこの近未来小説で、作者はどのように自国の未来を見ているかと言えば、アメリカが見せ付ける科学の進歩に較べて、ゲリラや銃が失くならない貧しい農村の姿だ。この二作に共通するのは、子供たちが食べるアイスクリームと、銃と、星空である。少年ベンの、幸福だが未来への漠然とした不安を描いた「アンドロメダ星座まで」のみ紹介させてもらうけど、ベンのなまあたたかいかなしみのようなものは、やがて深く現実と切り合うことになる、ということを書き記しておきたい。

次のSIAではベトナム戦争後の小説を取り上げるつもりだ。感性を鏡にして創作を授受するプロジェクトの意義は、まだ我田引水の域を出していない。やがて誰かにパトタッチできるか同様の交流が他の場所でも起きてはじめて、我が田も稲が育つ。

3月10日のSIA-DAY フィリピン編の最後に私はこう挨拶した。

「作家と作家の交流はクモの糸のように頼りないつながりだが、クモの糸もアジアの中に張りめぐらされれば、簡単に取り除けないものになるでしょう」

これは私の希い（ねがい）である。